

第4章 子どもの心の健康状態

4.1 子どもの現状

4.1.1 PTSD が疑われる症状

<震災前と異なる現在の子どもの様子（保護者調査問4）>

- ・現在の子どもの様子について、「震災前と異なる様子が見られるか」保護者に聞いたところ、「物音に敏感になったり、イライラするようになった」9.1%、「災害を思い出すような話題やニュースになると、話題を変えたり、その場から立ち去ろうとする」6.2%、「災害のことを思い出して突然おびえたり、興奮や混乱することがある」3.0%、「無表情でぼんやりすることが多くなった」1.5%であった。
- ・また、上記4項目に1つでも該当する子どもの割合は、14.1%であった。

保護者調査「震災前と異なる現在の子どもの様子」

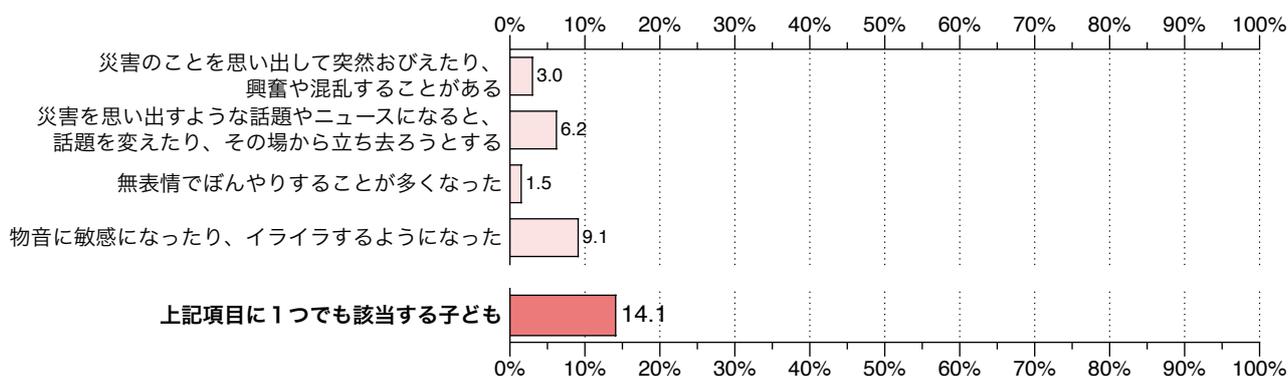


図 4.1：PTSD が疑われる症状

表 4.1：PTSD が疑われる症状

単位：%

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
災害のことを思い出して突然おびえたり、興奮や混乱することがある	7.1	4.3	1.4	0.9	9.1
災害を思い出すような話題やニュースになると、話題を変えたり、その場から立ち去ろうとする	7.7	8.0	4.8	3.7	8.2
無表情でぼんやりすることが多くなった	0.8	1.3	1.8	1.7	2.3
物音に敏感になったり、イライラするようになった	13.1	11.2	7.8	5.7	12.6

< PTSD が疑われる症状（属性別） >

- PTSDが疑われる症状が1つでも見られる子どもは、地域的には福島県（22.9%）、宮城県（19.0%）に高い傾向が見られた。また、その他の地域でも一定数見られた。
- 校種別では、特別支援学校20.5%、幼稚園20.2%、小学校17.6%、中学校11.5%、高等学校8.8%であり、年齢が低くなるほど増加する傾向が見られ、特別支援学校は幼稚園と同程度の高い割合を示した。
- 津波による校舎の被害別では、「大部分使用不能」30.4%、「一部使用不能」26.0%、「重大被害なし」18.9%であり、津波の被害が大きかった学校ほど症状が見られる子どもの割合が高かった。地震による校舎の被害別では、大きな差は見られなかった。
- 転校の有無別では、「転校した」38.6%、「転校後元の学校」24.1%、「転校しなかった」13.5%であった。
- 授業再開までの期間別では、「1か月以上」20.0%、「1か月以内」19.0%、「2週間以内」14.5%、「1週間以内」11.1%であり、授業再開までの期間が長いほど、症状が見られる子どもの割合が高かった。

PTSD が疑われる症状が1つでも見られる子ども

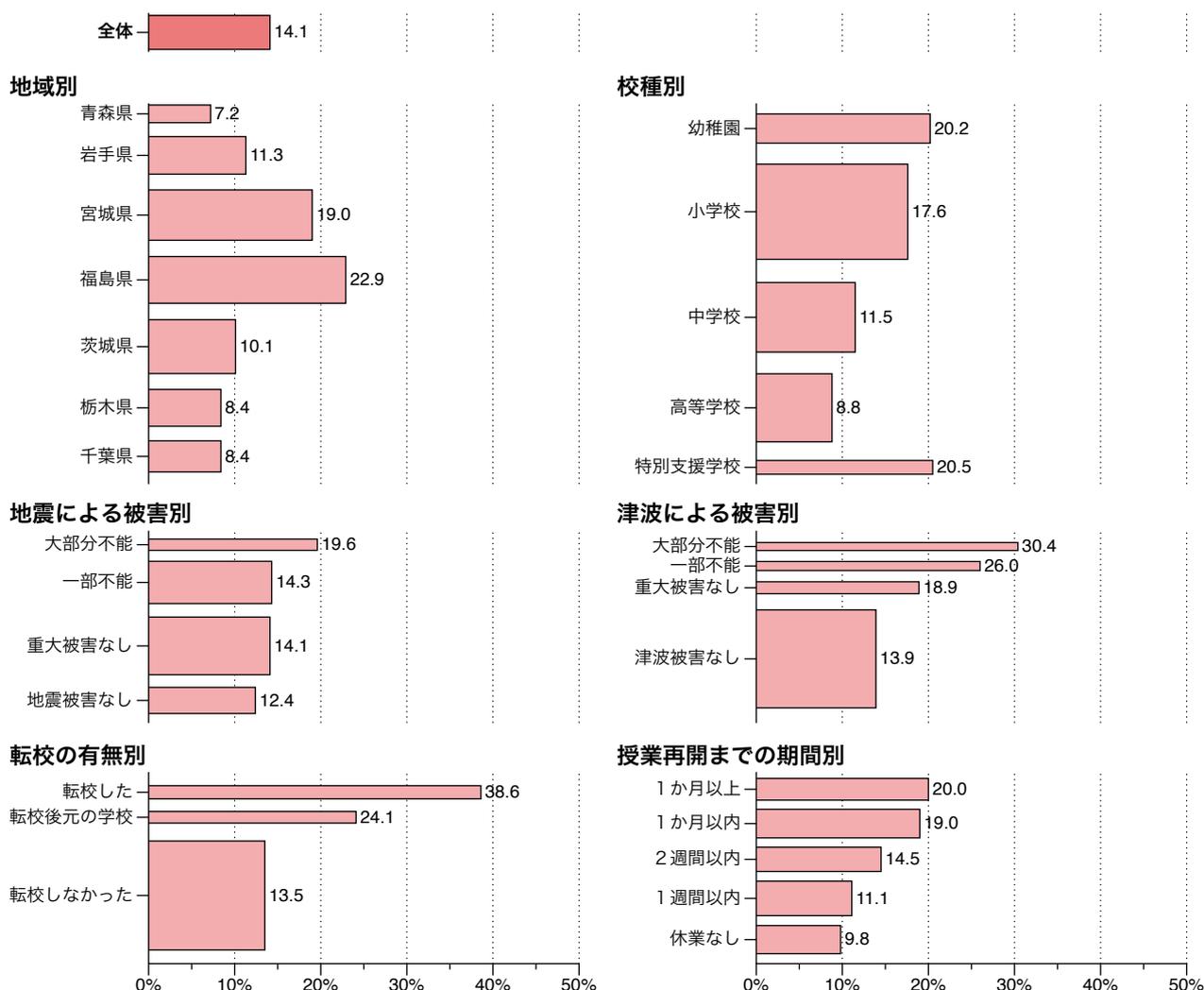


図 4.2： PTSD が疑われる症状が1つでも見られる子どもの割合（属性）

4.1.2 PTSD に関連する症状等

<震災前と異なる現在の子どもの様子（保護者調査問4）>

- ・現在の子どもの様子について、「震災前と異なる様子が見られるか」保護者に聞いたところ、PTSD に関連する症状等が見られる子どもの割合は、「よく甘えるようになった」（10.7%）が一番高く、「以前は一人でできていたことができなくなった」4.4%、「外出を怖がるようになった」1.5%、「学校を休みがちになった」0.8%であった。
- ・また、上記4項目に1つでも該当する子どもの割合は、12.9%であった。
- ・「よく甘えるようになった」、「以前は一人でできていたことができなくなった」については、校種別では年齢が低くなるほど増加する傾向を示し、特別支援学校は小学校をやや下回る値であった。

保護者調査「震災前と異なる現在の子どもの様子」

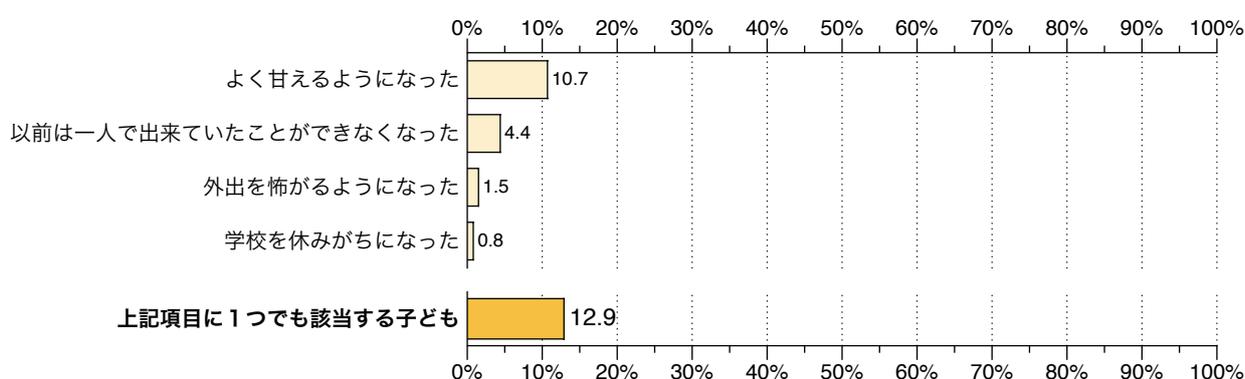


図 4.3：PTSD に関連する症状等

表 4.2：PTSD に関連する症状等

単位：%

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
よく甘えるようになった	25.2	16.9	4.6	2.4	12.0
以前は一人でできていたことができなくなった	10.8	7.2	1.7	0.6	4.6

< PTSD に関連する症状等（属性別）>

- ・PTSD に関連する症状等が1つでも見られる子どもは、地域的には、福島県（20.3%）、宮城県（16.4%）に高い傾向が見られ、その他の地域でも一定数見られた。
- ・校種別では、幼稚園27.8%、小学校19.8%、特別支援学校15.4%であり、年齢が低くなるほど増加する傾向が見られ、特別支援学校は小学校をやや下回る値であった。
- ・津波による校舎の被害が大きいほど割合が高く、転校した子どもは転校しなかった子どもより明らかに高い割合を示した。地震による校舎の被害別では、大きな差は見られなかった。

PTSD に関連する症状等が 1 つでも見られる子ども

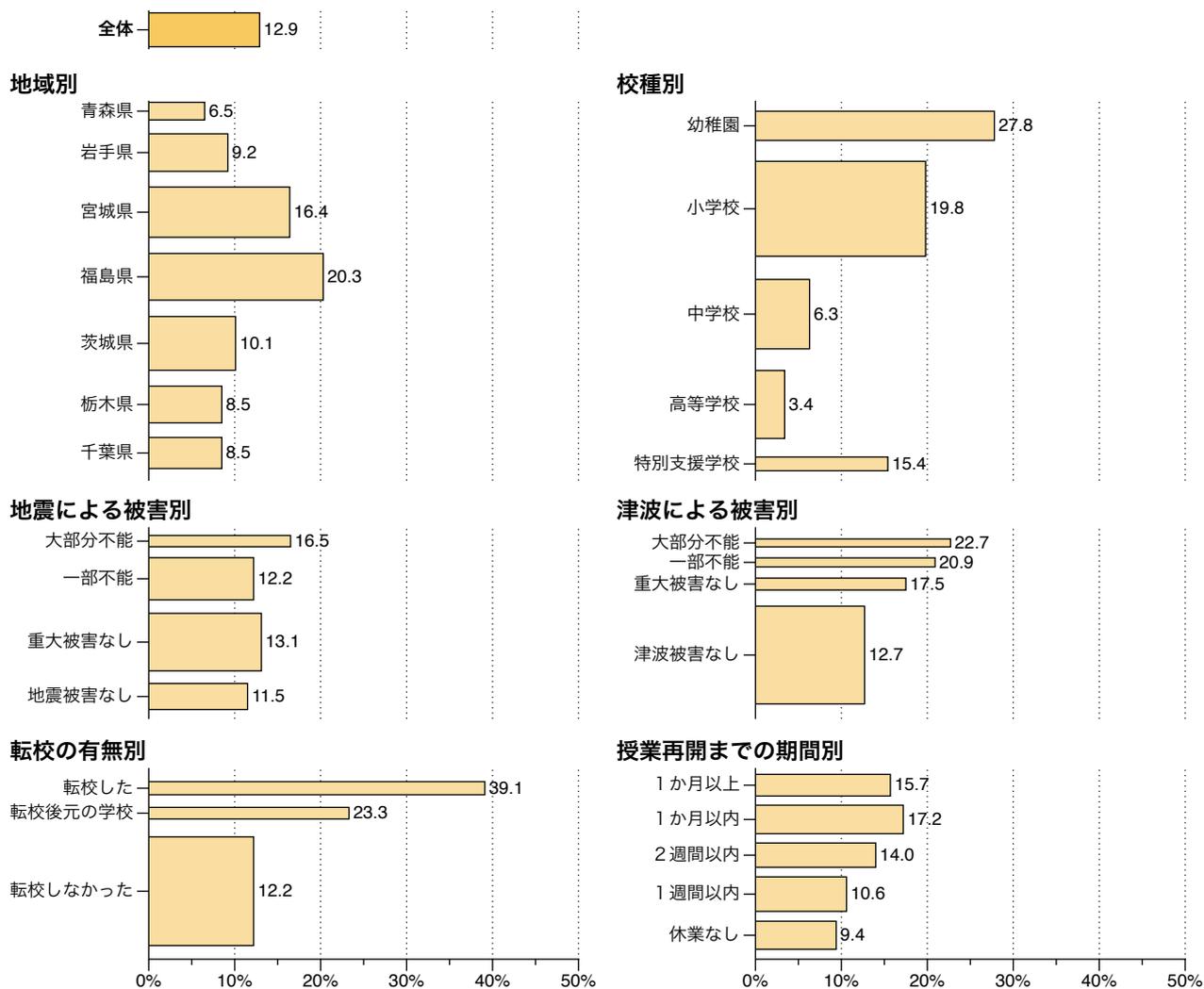


図 4.4：PTSD に関連する症状等が 1 つでも見られる子どもの割合（属性別）

4.1.3 一般的な心身不良の症状

<震災前と異なる現在の子どもの様子（保護者調査問4）>

- ・現在の子どもの様子について、「震災前と異なる様子が見られるか」保護者に聞いたところ、一般的な心身不良の症状が見られる子どもの割合は、「睡眠が十分とれなくなった」3.0%、「頭痛、腹痛、心臓の動悸、過呼吸、めまい等がおこるようになった」3.0%、「食欲や体重に大きな変化があった」2.2%、「元気がなくなり意欲が低下した」2.1%、「あまり話さなくなった」1.3%であった。
- ・また、上記5項目に1つでも該当する子どもの割合は、7.3%であった。

保護者調査「震災前と異なる現在の子どもの様子」

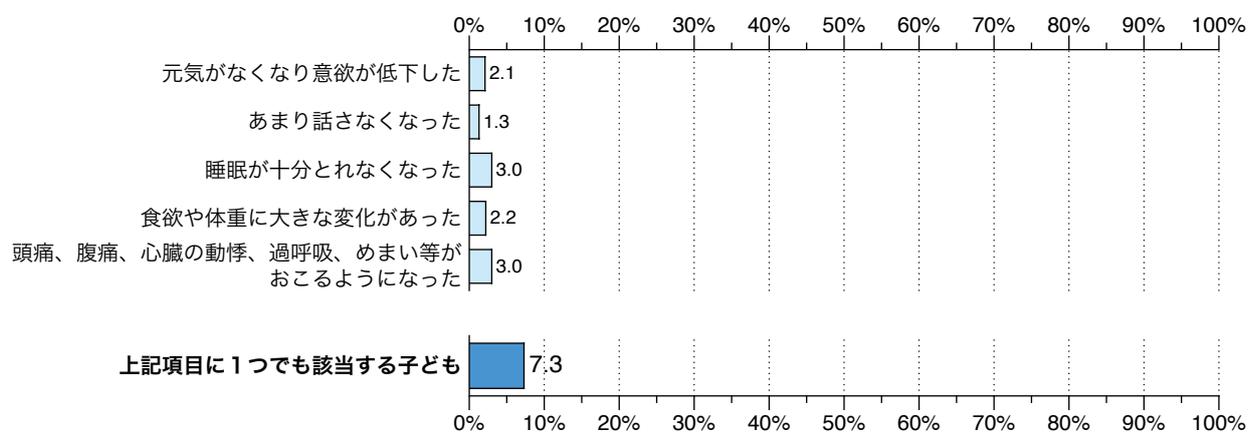


図 4.5：一般的な心身不良の症状

表 4.3：一般的な心身不良の症状

単位：%

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
元気がなくなり意欲が低下した	1.2	1.8	2.4	2.4	3.3
あまり話さなくなった	0.5	0.8	1.7	1.9	2.5
睡眠が十分とれなくなった	1.9	2.7	3.4	3.3	5.6
食欲や体重に大きな変化があった	1.4	2.3	1.9	2.2	4.3
頭痛、腹痛、心臓の動悸、過呼吸、めまい等がおこるようになった	1.4	2.9	3.3	3.2	2.8

<一般的な心身不良の症状（属性別）>

- ・一般的な心身不良の症状が1つでも見られる子どもは、地域的には、福島県（16.0%）、宮城県（8.9%）に高い傾向が見られ、そのほかの地域でも一定数見られた。
- ・校種別では、幼稚園の割合がやや低く、小学校・中学校・高等学校はほぼ同等であり、特別支援学校が最も高い割合を示した。
- ・津波による校舎の被害が大きいほど高く、転校した子どもは転校しなかった子どもより明らかに高い割合を示した。また、授業再開までの期間が長いほど割合が高かった。

一般的な心身不良の症状が1つでも見られる子ども

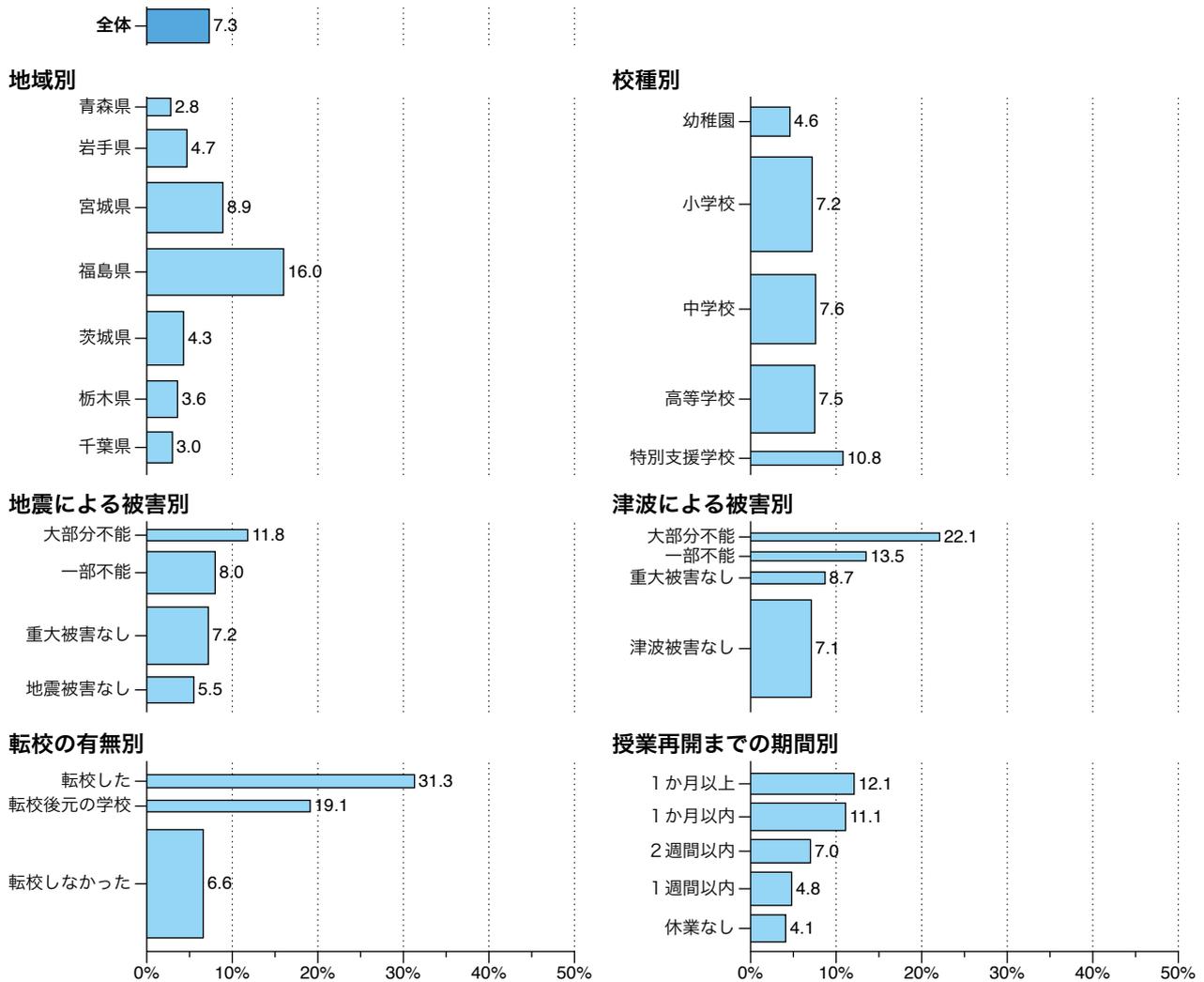


図 4.6：一般的な心身不良の症状が1つでも見られる子どもの割合（属性別）

4.2 子どもの現状に関する考察（非常災害時の子どもの心のケア調査協力者会議まとめ）

PTSD が疑われる症状について

本調査の結果、保護者の回答に基づくと14.1%（男子12.4%、女子16.0%）の子どもに「PTSD が疑われる症状」のうち少なくとも1つが見られた。症状別には、PTSD の3大症状のうち再体験症状が3.0%、回避・麻痺症状がそれぞれ6.2%・1.5%、過覚醒症状が9.1%という割合であった（症状の重複あり）。校種別に見ると、高等学校8.8%、中学校11.5%、小学校17.6%、幼稚園20.2%と年齢が低くなるほど増加する傾向を示し、特別支援学校20.5%は幼稚園と同程度の高い割合を示した。PTSD が疑われる子どもの割合は災害（地震・津波）による被害が大きい地域ほど高く、転校した子ども（38.6%）は転校しなかった子ども（13.5%）と比べて明らかに高い値を示した。本調査が被災後1年余り経た時点で行われたことを考慮すると、今回観察された症状は一過性のストレス反応とは考え難く、PTSD を強く示唆する症状であると推測される。この推測は、今回の結果が、年齢が低く、障害のある子どもほどPTSD を発症しやすいという精神医学の知見と合致していること、及び被害の程度が大きい地域ほど割合が高いことから支持される。

PTSD は長期持続する慢性疾患であり、児童精神科医をはじめとする専門家による治療を受けない限り、自然に完治することは少ない。そのため、子どもが示すPTSD の兆候を見落とさないようにし、PTSD が疑われる子どもを専門機関につなぐことが重要となる。PTSD の3大症状のうち麻痺症状は「解離症状」（意識が目の前の現実から離れる等の症状）に近いと考えられるが、近年、解離症状は重症化しやすいサインであることが知られるようになった。このように、麻痺症状は重要な症状でありながら他の症状と比べて目立ちにくいいため、見過ごさないよう特に注意する必要がある。

PTSD に関連する症状等について

次に、心理的退行（幼児返り）など「PTSD に関連する症状等」（3大症状以外でPTSD に伴って出現しやすい症状）が見られた子どもは12.9%であった。校種別に見ると、高等学校3.4%、中学校6.3%、小学校19.8%、幼稚園27.8%と年齢が低くなるほど増加する傾向を示し、特別支援学校15.4%は小学校をやや下回る値であった。また、災害（地震・津波）による被害の程度が大きい地域ほど割合が高く、転校した子ども（39.1%）は転校しなかった子ども（12.2%）より明らかに高い割合を示した。すなわち、「PTSD に関連する症状等」が見られた子どもの割合は、「PTSD が疑われる症状」に近い値であり、年齢、障害の有無、被害の程度による影響についても「PTSD が疑われる症状」と同じ傾向を示している。

一般的な心身不良の症状について

元気のなさ、睡眠障害、頭痛などPTSD に限らず広くストレスによりもたらされる「一般的な心身不良の症状」が見られた子どもの割合は7.3%であった。また、災害（地震・津波）による被害の程度が大きい地域ほど高く、転校した子ども（31.3%）は転校しなかった子ども（6.6%）より明らかに高い割合を示した。これは「PTSD が疑われる症状」及び「PTSD に関連する症状」と同じ傾向である。一方、年齢・校種による影響については、幼稚園4.6%が最も低く、小学校7.2%、中学校7.6%、高等学校7.5%がほぼ同等で、特別支援学校10.8%が最も高い割合を示した。

「一般的な心身不良の症状」はストレス反応として広く生じやすいものであるが、今回の調査では「PTSD が疑われる症状」14.1%及び「PTSD に関連する症状等」12.9%より少ない7.3%であった。その理由として、被災から1年以上経過した時点の調査のため、被災後すぐに現れる急性のストレス反応が減り、慢性化した症状が中心となっていた可能性がある。

症状の重複及び健康観察の留意点について

今回、調査した3種類の症状どうしに重なりが見られる(図4.7)。「PTSDが疑われる症状」をもつ子どもの約半数が「PTSDに関連する症状等」を示し、約3割が「一般的な心身不良の症状」を示した。すなわち、PTSDを発症している可能性のある子どもは、それ以外の症状を併せ持つことが多いと言える。

逆に、「PTSDに関連する症状」を示した子どもの約半数、「一般的な心身不良の症状」が見られた子どもの約6割に「PTSDが疑われる症状」が見られた。したがって「PTSDに関連する症状等」や「一般的な心身不良の症状」が見られた場合、PTSDの症状がないか探ることが大切であると考えられる。また、「PTSDが疑われる症状」が見られた子どものうち約4割が「PTSDが疑われる症状」以外の症状を示さなかった。このことは、PTSD特有の症状に十分注意しないとこの疾患を見過ごす可能性があること示唆している。特に、PTSDの麻痺症状は家庭でも見過ごされやすいため、家庭での情報を得るだけでなく、PTSDに対する保護者の気づきを促すような情報を提供することも健康観察にとって重要であると考えられる。

「PTSDが疑われる症状」及び「PTSDに関連する症状」については、症状の性質上、学校よりも家庭で出現しやすいと言われているため、教職員が保護者と密接に連絡を取りながら子どもの様子を観察することが重要である。

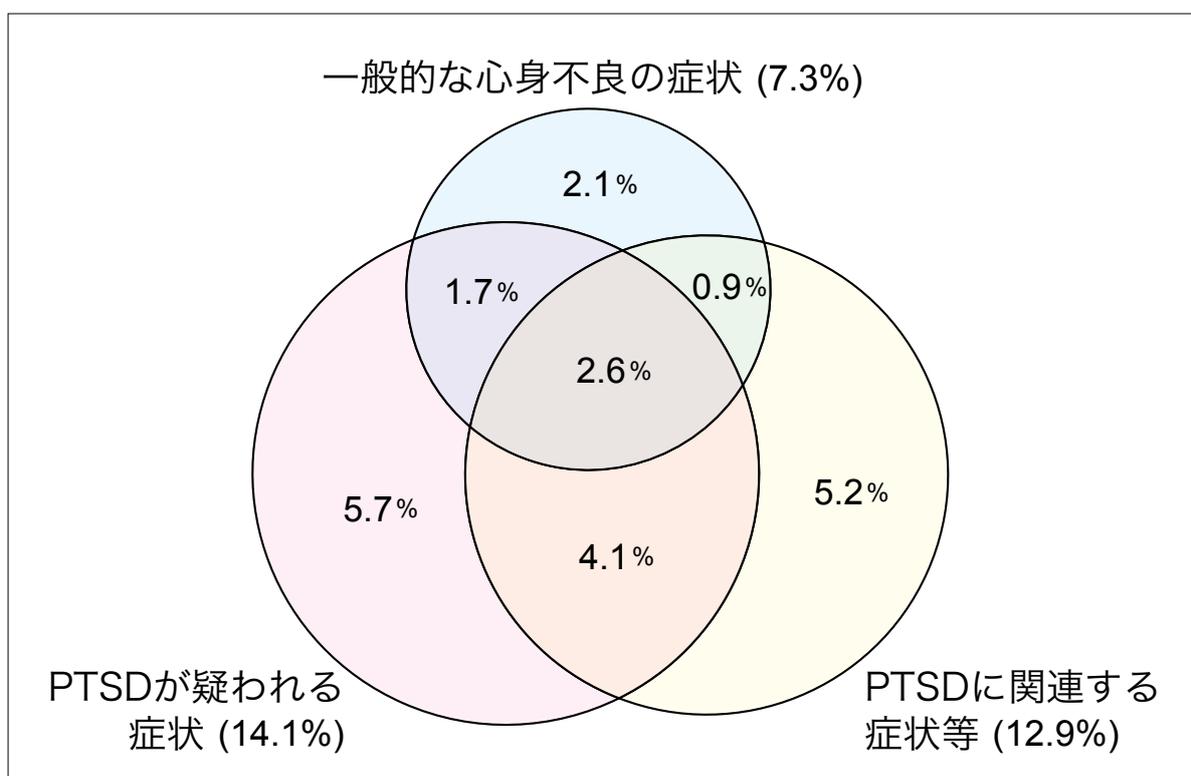


図 4.7 「症状等の重複について」

*小数第2位を四捨五入したため、内訳と合計は一致しないことがある。

地域別の特徴について

最後に、地域別に見た場合、「PTSDが疑われる症状」、「PTSDに関連する症状」、「一般的な心身不良の症状」のいずれも、福島県が最も高く(全体平均の約1.5~2倍程度)、次いで宮城県が高かった。

福島県における割合の高さについては、上記3種類の症状のうち、調査時点において継続中のストレスを反映しやすい「一般的な心身不良の症状」が他県より突出して高かったことにより、地震と津波による災害に加え、放射線被害と関連する諸々のストレスが関与している可能性が考えられる。このような可能性も念頭に置き、今後も引き続き子どもの心の健康状態を慎重に観察し、ケアに当たる必要があると考えられる。